

第11回「泉大津市オリアム随筆賞」

【オリアム随筆賞（佳作）】

メモリアル セーター

高尾 光秀・福岡県北九州市

蝸かまじが鳴いている。どこか悲しげで憂いを含んだ音色は夏の終わりを感じさせた。

県境にある恭子先生の編み物教室に向かっていた。バスと電車を乗り継ぎ、最後はタクシーに乗った。市内とは異なり舗装もしていない道路は田んぼの畦道と変わりがなかった。

恭子先生は本家筋の人で生まれつき足が少しだけ不自由だった。そのせいで外出することとはほとんどなく、屋敷の離れを改装して教室を開いていた。私は教室の生徒ではなかったが冬のセーターを編んで頂くために毎年母と一緒に訪れていた。今年で十年目になる。

ドアの前に立つと中から編み機のキャリッジが左右にスライドしていく音が聞こえる。滑らかで流れるような音律が心地よく、草原を抜ける風を思わせた。そして、いよいよこの場所に来たという実感が湧いた。

母が恭子先生と話している時間は長く退屈だ。今年の夏は暑さが違うのなんのとうでもいい話が続くのである。去年だって今年の夏は違うという話をしていたはずだ。毎年、飽きもせずお決まりのやり取りを繰り返している。そんなことを考えていると突如として初めてのフレーズが飛び出した。

「来年から中学生なんですよ、先生」

「もう、中学生ですか、早いですね」

中学生という新しい言葉が部屋の空気までも一新した。それもそのはずだろう。私の内面はすでに小学生という児童ではない。すなわちそれは、大人への階段を上り始めたことを意味する。もう少し具体的に言えば、この場所に荒くれ者が侵入して恭子先生に危害を加えようとしたとする。そうなれば、私が立ちはだかなければならない。なぜなら、この場所ですら一人の男だからだ。

精神的には小学生を卒業している私にはこの程度の覚悟と自覚はあった。

待ちに待った私と恭子先生の二人だけの時間が来た。採寸の時間だ。先生の指先が私の肩や背中に触れる。息遣いを間近で感じる瞬間でもある。去年は邪魔にならないように息を止めて顔を真っ赤にするという失態を曝した。今年は違う。余裕で鼻から吸い鼻から出している。もちろん、息も臭くない。

「また大きくなったねえ、丈なんて先生の中指くらい伸びているよ」

今年も私の成長を確認してもらえた。嬉しさがこみ上げてくるのだけれど、デレデレなんてダメだ。クールに対応するのが大人だ。

「朝からご飯をお代わりしてますから」

「偉いね、もっと、もっと大きくなるよね」

これで有頂天になる私ではない。分析をしてみる。大きくなったねえと言われることはびっくりするくらい大きくなったわけではないのだ。あくまでも想定内の成長だったということだ。だから、次のもっと、もっとに繋がる。想定内だったことを残念に思うべきだ。

毎年の恒例となっていたセーター作りは採寸に始まり、出来上がったセーターに袖を通す姿を恭子先生に見てもらうことで終わる。しかし、今回はそうはならなかった。

「オイルショック」で日本中が混乱の時を迎えたからだ。それは、遠い世界の出来事ではなかったのだ。今、ここで起こっているものだった。建築会社を営んでいた父の仕事は激減した。打切りになった工事現場が続出していた。本家の方も同じような状態らしい。

セーターは秋の終わりに郵送で届けられた。本来ならば今頃は、私が袖を通し、恭子先生が見頃や袖の具合を直す時間があるのだ。セーター越しに身体に触れてもらうことは成長を確かめる最終段階でもある。そして、それは私にとって何より嬉しい時間だったはずだ。そのことを今さらのように思い知らされた。

小包に同封されていた手紙には、十年という長きに渡り私の成長を見続けられた喜びともう見ることができない無念さが書き記してあった。私が恭子先生に自分の成長を見てもらえることが嬉しい時間であったように先生もまた同じであったことを知った。

最後に教室はしばらくの間、お休みしますという一文が添えられていた。私にはそれが永遠の別れのように感じられた。

恭子先生の手紙を読んだ時から身体のどこかに穴が空いてしまったようになった。何かをしようとしても、そこから力が抜けていく感覚がいつまでも続いたのだった。

案の定、冬が終わり春になっても教室再開の知らせは届かなかった。「しばらくの間」とは少なくとも半年ではなかった。気持ちが悪くまた一段沈んだ。そんな春に一つだけ知ったことがある。大人たちは静かで平穏な時は長く続かないことを学んでいたのだ。だから、今年の暑さは違いますねと平穏を確認し合っていたのだろう。平和でいいですね、なんて気恥ずかしくて口にしたくないから、暑さの話にしていたのだ。

そんな大事なことを退屈だなんて考えていたなんて私は本当に愚かで子どもであった。